

令和7年度 公益財団法人スポーツ安全協会スポーツ活動等普及奨励助成事業
国立曾爾青少年自然の家 幼児向け森林環境教育プログラム開発「森のえんそく」実践報告書

- [主 催] 国立曾爾青少年自然の家
[助 成] 公益財団法人 スポーツ安全協会
[期 日] 令和7年10月17日（金）
[場 所] 国立曾爾青少年自然の家 キャンプ場周辺の森林
[対 象 者] 名張市の保育園 年長児15名、引率教員4名
[担 当] 菱川裕輝・増田学（企画指導専門職）



1 趣旨・目的

- 森への親しみと興味・関心の育成
○主体的に自然と関わる態度の育成
○五感を使った自然との関わり体験
○自然の多様性や循環への気づき

2 プログラム展開

時間	活動名	ねらい
12:45～	カモフラージュゲーム	森を注意深く見る目を育てる
13:00～	森についてみんな教えて	“森観”的確認と振り返りの準備 (ホワイトボード活用)
13:05～	生き物センサー	森に住んでいる動物への気づき
13:10～	棒並べゲーム	自然物への触れ合い
13:30～	赤ちゃんの木とお年寄りの木	いのちの循環への気づき
14:00～	自由活動	主体的な自然との関わり (道具を使った遊び・焚き火等)
14:55	振り返り	学びの可視化

3 活動の様子

【導入フェーズ】

カモフラージュゲーム: 移動中、道沿いに配置した人工物を探すゲーム。活動の勝手がわかってくると我先に見つけようとする積極的な姿が見られた。

森についてみんな教えて: 「森にあるもの」を子どもたちに問いかけ、ホワイトボードに黒色で記録。最後に体験後の気づきを赤色で追加し、学びの深まりを可視化する仕掛け。自分の知っていることをどんどん発表する姿が見られた。

生き物センサー: 動物の痕跡が近くにあると職員が「ピピピ！」と合図。遊び感覚で森の違いに目を配り、動物の痕跡を探す姿が見られた。



赤ちゃんの木とお年寄りの木:周りの木を比べて、一番年寄りの木と赤ちゃんの木を探す。枯れた木や朽ちた木にも注目し、「木が土に還り、新たな命の栄養になる」循環を伝えた。木が土に還ることを知り、驚いている様子の子どももいた。



【自由活動フェーズ】

概要：職員による直接指導はせず、子どもたちが興味のあるものに触れ、遊びます。

引率教員の4人数分に班を編成。各班にのこぎり、剪定鋏、聴診器、虫メガネを配布。自然発見ビンゴカードや色見本カードも用意し、遊び始めやすい環境を整えた。また、職員が火を起こしておき、焚き火でマシュマロ焼き体験ができるコーナーも設営した。



子どもたちの多様な遊び：

- ・木の棒でドラムのように音を響かせる
- ・虫眼鏡で葉脈や樹皮を観察「すごい!線がいっぱい!」
- ・焚火に杉葉を入れ「パチパチ言った!」と火の変化を楽しむ
- ・聴診器で木の音を聞きき、「なんかの音がする!」
- ・のこぎりで枝を切る挑戦
- ・色見本カードで森の色探し



【振り返り】

最初のホワイトボードに戻り、新しく知ったこと、分かったことを赤字で追加。「いっぱい増えた!」と森のことを知れたことに満足する様子が見受けられた。「また来たい!」という声が多数あがつた。

4 ふりかえり

【参加者の声】

- ・「(木の) ぼうでたたいたのがたのしかった」「むしめがねでみたはっぱがつぶつぶだった」など、五感を使った発見が多く聞かれた。
- ・「きはやわらかくなるんだなあ。つちになるの、しらなかった」と、自然の循環に対する純粋な驚きがあった。
- ・保護者からは「普段できないような体験をさせてもらいありがとうございました」「夜ご飯の時は、楽しかったお話をたくさん聞かせてくれました」といった感謝の声が寄せられた。
- ・引率教員からは「午前の登山(大きな自然)から午後の体験(小さな自然)へとフォーカスする構成で、子どもたちが個体に関心を持つようになった」との評価があった。アンケートには、「時間が足らない。」「次年度は複数回(初夏と秋)行きたい」と記載があった。

【担当者所見】

本プログラムは前半に「導入」で森での遊び方を体験し、後半に「自由活動」でそれを応用するという構成が効果的に機能した。特に自由活動では、子どもたちが自らの興味に従って没頭し、主体性や探究心が發揮される姿が確認できた。「また来たい!」という声や、帰宅後も家族に森の話をするなど、活動が単発の体験に留まらず、家庭での会話や次の行動(「次は家族を連れて行く」等 ※保護者アンケートより抜粋)に繋がっている点は大きな成果である。今後は、活動時間の確保や保護者参加の機会提供などを検討し、より深い学びの場を作っていくたい。